生き方

「家族する」ことの大切さ

福岡大学人文学部文化学科准教授　宮野 真生子

執筆者紹介

宮野 真生子（みやの まきこ）

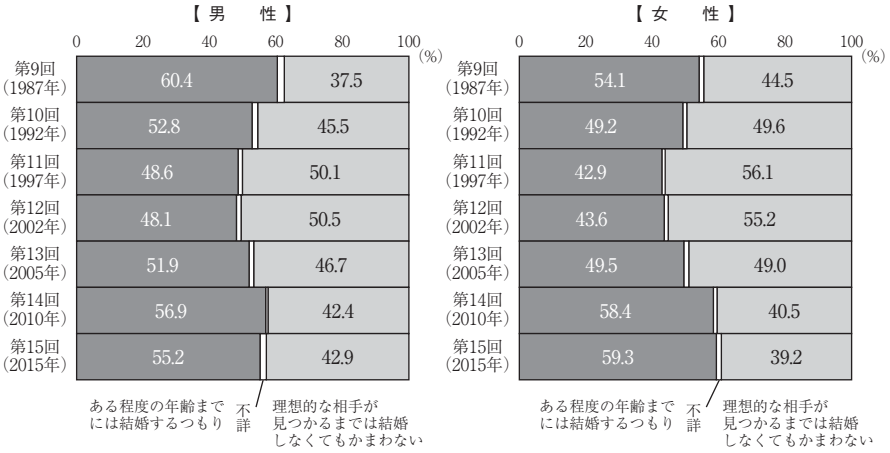
1977年生まれ。福岡大学人文学部文化学科准教授。専門は近代日本の哲学・思想史。九鬼周造を中心とした京都学派の哲学と、愛・性・家族の問題を精神史的視点から研究している。

「あなたにとって、家族って何ですか？」と問われたら、何と答えるだろうか。安らぎの場所、帰るべき家、愛情のある空間、はたまた、束縛の原因や煩わしい人間関係だろうか。あるいは、改めて問われるまでもない、あって当然の居場所だろうか。確かに、かつて「家族」という関係は、多くの人にとって当たり前のもので、わざわざ「家族とは何か」と定義するまでもないと思われていた。家族の中に産み落とされ、そこで育ち、そして、一定の年齢になれば自ら家族を作って生きてゆく。それがスタンダードな生き方だった。

しかし、平成27年度の厚生労働白書によれば、現在、生涯未婚率は男性で24.2%、女性で14.9%になっており、さらに20年後には、男性29.0%、女性19.2%に達すると予測されている[1]。今は自由な時代、それぞれのライフスタイルに合わせて自分なりの人生を生きることが

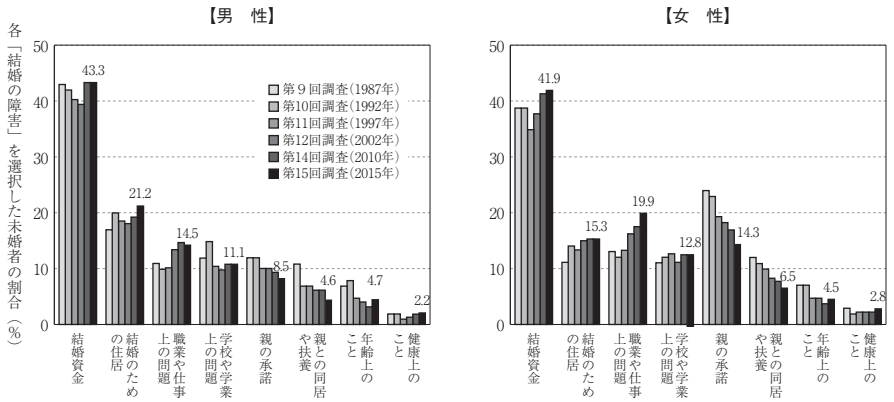
できる。未婚率が上がっているのも、そうした自由を謳歌（おうか）するためだろう、と思われるかもしれない。では、未婚を選んだ人は結婚に対してどのような考えを持っているのだろうか。ともかくある程度の年になったら結婚を選ぶべきだと思っているのか、それとも、好きな人が現れないなら結婚しなくてもいいと思っているのか。これについても国立社会保障・人口問題研究所が調査を行っている。その調査によれば、未婚者のうち「ある程度の年代までに結婚するつもり」と考えている人の割合は1990年代を通じて低下を続けていた。結婚は「個人の自由」、合う人がいれば結婚するが、無理にする必要はない、というわけである。しかし、こうした選択をする人は現在減ってきている。図１を見ても分かるように、2000年代に入ったあたりから、「ともかくある程度の年になったら結婚をしたい」という人が増えてきている。つまり、結婚願望は強くなっているのだ。なのに、未婚率は上がっている。一体なぜなのか。

図２は、結婚願望のある未婚者に対し「いま結婚するとしたら何が障害になりますか」と質問し、得られた回答の結果である。最も多い回答が「結婚資金」となり、結婚を妨げる要因の一つが金銭的理由であることが明らかになった（もちろん、「良い人に出会わない」などの実際面の理由もある）。ところで、「結婚資金」とは一体何を指しているのだろうか。そもそも、結婚とは、制度的にいえば婚姻届を出すだけのことで、特段お金のかかるものではない。では、一緒に住むための住居費のことだろうか。確かに引っ越しにはお金がかかる。だが、それも元々一人暮らしをしている者同士であれば、むしろ一つの家をシェアすることで金銭的には楽になるはずである。あるいは、結婚式や新婚旅行のためのお金だろうか。しかし、それも結婚に「必須」のことではない。こうした状況に対し指摘されるのが、特に男性たちが根強く持つ「結婚するなら、家族を養えるだけの稼ぎを」というプレッシャーの存在である。だから、結婚に踏み切れない男性たちは「いやぁ、まだちゃんとしてないから･･･」と言葉を濁す。この発言が、現在の結婚と家族を巡る問題を考えるときの鍵になる。「家族を養う」という発言の背後には、おそらく「この程度の暮らしをしないと」「こういう毎日が結婚したら可能になるんだ」という、「ちゃんとした家族」のイメージや生活のかたちが隠れている。それはいったい、どんなものだろう。恋をした相手との温かい生活、かわいい子ども、笑いの絶えない食卓、癒やしのマイホーム。一言で言うならば、愛情溢れる家庭である。こうした家庭像が悪いというわけではない。ただ、あまりに家族というものを理想化していないだろうか。家族の理想像を高く設定し、



注：対象は「いずれ結婚するつもり」と回答した18～34歳の未婚者。客体数は、第９回男性（3,027）、女性（2,420）、第10回男性（3,795）、女性（3,291）、第11回男性（3,420）、女性（3,218）、第12回男性（3,389）、女性（3,085）、第13回男性（2,732）、女性（2,759）、第14回男性（3,164）、女性（3,044）、第15回男性（2,320）、女性（2,296）。
設問「同じく自分の一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは、次のうちどちらですか。」（１.ある程度の年齢までには結婚するつもり、２.理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない）。

図１　（結婚意思をもつ未婚者の結婚に対する考え方）[2]



注：対象は18～34歳の未婚者。何%の人が各項目を結婚の主要な障害（２つまで選択）と考えているかを示す。グラフ上の数値は第15回調査のもの。一年以内の結婚に障害があると回答した割合は、第９回（男性67.1%、女性69.2%）、第10回（同67.9%、71.3%）、第11回（65.0%、67.8%）、第12回（64.5%、70.1%）、第14回（68.1%、71.5%）、第15回（68.3%、70.3%）。

図２　（未婚者に対して尋ねた結婚の障害）[3]

それにふさわしい自分じゃないと諦める。それは勝手にハードルを上げて、「そんなの自分には無理」と踏み出す前から撤退しているだけではないだろうか。

一方で、問題のある家族も増えてきている。DV（ドメスティックバイオレンス＝家庭内における暴力行為）の被害件数は年間５万件にのぼり、児童虐待も10万件を超えている。ここにも「愛情のある家族」のイメージはちらつく。特にDVでは、相手への憎しみゆえに暴力が振るわれるのではなく、むしろ、「なぜ、自分のことを分かってくれないのか、大切にしてくれないのか」「愛しているなら、できるはず」といった、ある種の歪んだ愛情表現の結果として、暴力が振るわれることが多い。そして、DVを受ける側も「自分が至らないから」「自分の愛情が伝わっていないから」と愛情という名の下に自分を責め、そこから動けなくなる。歪んだ愛の理念の下に互いを縛り付けていく、いわゆる「共依存」である。だが、そこで言われている愛情とは一体何なのか。

先日、「家族とは何か」というテーマで哲学カフェを開催した。哲学カフェというのは、先生が一方的に哲学の講義をするものではなく、一つのテーマについて参加者が思い思いの発言をし、それを聞き、議論しながら、テーマについて掘り下げていくというものである。その時の哲学カフェは、ある大型書店での開催だったため、集まった人も老若男女さまざま、語られた言葉もさまざまだった。

さて、改めて「家族とは何か」と問いかけられて、皆さんはどのような答えを思い付くだろうか。血のつながった者同士が一つの家で共に暮らすこと、だろうか。だが、そもそも夫婦に血のつながりはない。それに対し、参加者からは「夫婦という血のつながりのない者同士を結び付けるのが、子どもなのではないか」という意見があった。つまり、子どもを介して、夫婦は血を共有する存在になるというわけだ。だが、こうした考え方に立つと、家族において「子ども」というのは実の子しか認められないことになり、養子では家族になれないということになる。それに対して、「いや、大切なのは血のつながりということではなく、子どもを『育てる』という行為ではないか、夫婦が共に子どもを養育するという共同の責任によって、血のつながりもない二人が強く結び付くことになる」という意見を述べる参加者もいた。実際、「育てる」という行為は、人に責任感を芽生えさせる大きなきっかけになる。シェアハウスを運営し、自らもそこで暮らしている社会学者の方とお話をした際、シェアハウスがうまくいくコツとして挙がったものの一つが「植物でもいいので、一緒に何かを育てるといろいろ変わりますよ」ということだった。たとえそれが、いずれ食べることになるバジルだとしても、「葉がついた！」「ちょっと元気がないよ、誰か水やり忘れてない？」というふうに、育ってゆくプロセスを共有し、一つの対象に責任を持つことは、そこで暮らす人たちのつながりを強化するというわけだ。さらに言えば、おそらく「育てる」という経験を通じて、人は愛情を注ぐことの難しさと大切さを覚えてゆくのだろう。

丸善名古屋本店での哲学カフェ「家族って何？」の一コマ

では、やっぱり家族は愛だよということになるのだろうか。そして、そのためには、共に暮らすことが必要なのだろうか。いや、事はそう簡単ではない。哲学カフェでも「やっぱり家族ってある種の愛がいるのかなぁ」という結論に傾きかけたのだが、そこで転機になったのが、ある年配の男性からの発言だった。少し恥ずかしそうに彼は、「私はもう退職して、子どもも独り立ちして、妻と一緒に暮らしていますが、といって愛情深いという感じでもないですねぇ。子どもも滅多に帰ってきませんし、育てた記憶もはるか彼方（かなた）ですよ」と語り始めた。家族は子どもでつながると言うが、その子どもはずっと一緒にいるわけではない。その時の苦労を共有することは意味のあることだが、それだけが夫婦をつなぐのだとしたら、子どもが巣立った後の夫婦の関係とはある種の抜け殻のようなものになってしまう。だから、子どもが巣立った後にこそ、「家族って何だろうって思うんですよね」とその男性は言った。家族と聞くと、父母がいて、子どもが一緒に暮らすと私たちはイメージしがちである。だが、実のところ、子どもがいて、賑やかに食卓を囲んでワイワイやっている期間は20年にも満たない。家族の暮らしは変わってゆく。私たちが持つ「温かな家族」というイメージも、その変化の中の一つに過ぎない。だとしたら、今皆さんが所属している家族もまた、ある意味で「かりそめ」のかたちでしかない。だが、この「かりそめ」が大切な視点だ

と私は思う。家族とは、次へと出発するための拠点であり、そのために「このようなカタチ」でたまたま今一緒に暮らしていると考えてみてはどうだろう。いわば、家族は一時的な集団に過ぎないという捉え方である。これに対して、子どもは巣立つが、夫婦は残るではないかと思うかもしれない。確かに、表面的に見れば、子どもが独立しても、夫婦だけは変わらずに残っているように見える。だが、子どもを持つ前の夫婦と子育てをする夫婦、そして、子どもが育った後の夫婦は、全く違う関係性になっていないだろうか。だからこそ、近年では、子どもが独立した後に田舎暮らしを始めたり、それまでの広い家を売り、新しい暮らしにふさわしい家に住み替えて、もう一度夫婦の関係をリスタートする人たちが増えている。つまり、家族は、脱皮し、形態を変えるものなのだ。その意味で、家族とは誰か（何か）を育てる場なのではなく、そもそも、家族それ自体が育てられねばならないものと言える。これは至極単純なことだが、忘れがちなことである。なぜなら私たちは「家族」と聞くと、「愛情」をイメージし、それは恋愛して結ばれた二人が共に暮らせば、自然と出来上がってくるもののように考えてしまうからだ。それゆえ、始めに見たような、理想の家族像のハードルが無闇（むやみ）に高くなったり、あるいは愛の名の下に相手を束縛するようなことが生じてしまう。だが、家族とは、結婚によって自動的に出来上がるものではない。家族とは「家族である」という状態のことではなく、「家族する」行為によって初めて成り立つものだと私たちは心に留める必要がある。そして、「家族する」という行為によって家族が成り立つ以上、それは変化するし、変化に合わせたメンテナンスも必要であるし、手間を掛けねばならない。しばしば、家族は最後のセーフティネットであるということが言われる。家族は確かにセーフティネットとして機能することがあるだろう。だが、それはセーフティネットとして作り上げてきた人だけが言えることなのではないだろうか。

2016年４月出版『愛･性･家族の哲学』シリーズ（ナカニシヤ出版）

〈参考文献〉

[1] 『平成27年度版　厚生労働白書』８頁、http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15-1/dl/gaiyou.pdf
[2] 『第15回　出生動向基本調査』２頁、国立社会保障・人口問題研究所、2016年、http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou2.pdf
[3] 同上、６頁